

しろ が たに ごう ふん かた やま じょう あと
城ヶ谷 7号墳・片山城跡

一般地方道大垣池田線道路改良工事に伴う

緊急発掘調査報告書

1998

岐 阜 縿

財団法人 岐阜県文化財保護センター



巻頭写真1 城ヶ谷7号墳近景（南より）



巻頭写真2 城ヶ谷7号墳石室全景（上が西）

序

池田町は、県内でも有数の群集墳が点在し「古墳の町」として広く知られています。この地は、古墳だけでなく、先人達が残した足跡が数多く残されています。こうした文化遺産を保護し後世に伝えていくのが我々の責務の一つであると考えられます。

さて、このたび、一般地方道大垣池田線道路改良工事に伴い、記録保存をはかるため片山城跡の発掘調査を実施しました。発掘調査は、岐阜県揖斐土木事務所から岐阜県教育委員会に委託され、さらに岐阜県教育委員会から再委託を受けた財団法人岐阜県文化財保護センターが担当しました。片山城跡は、戦国時代末期に築かれた山城として知られています。今回の調査区内から城に関わる遺構を確認することはできませんでしたが、発掘調査中、山の斜面に埋没していた古墳を検出しました。調査区周辺に城ヶ谷古墳群があることから、新たに発見した古墳を「城ヶ谷7号墳」としました。城ヶ谷7号墳は、調査の結果、7世紀中頃に築造された横穴式石室を有する後期古墳であることが明らかになりました。城ヶ谷7号墳は、古来、「円興寺道」として多くの人々が行き交った道に沿うように築かれていきました。古墳の立地や交通路との関わりを考えいく上で興味深い発見となりました。今回の成果が池田町内及び周辺地域における後期古墳研究の一助となることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたってご協力いただいた関係各機関並びに地元の関係各位の皆様には厚くお礼申し上げます。

平成10年3月

財団法人 岐阜県文化財保護センター

理事長 篠 田 幸 男

例　　言

1. 本書は揖斐郡池田町片山字城ヶ谷に所在する城ヶ谷7号墳(08770)・片山城跡(01943)の発掘調査報告書である。
2. 本調査は一般地方道大垣池田線道路改良工事に伴うもので、岐阜県揖斐土木事務所から岐阜県教育委員会が委託を受けた。発掘調査は財團法人岐阜県文化財保護センターが実施した。
3. 発掘調査は平成8年度に実施し、飯沼暢康が担当した。
4. 本書に記載した遺物の実測(拓本を含む)は、次の者が主に行った。
　　飯沼暢康 高島桂子 西垣千賀子 西田富子
5. 実測図等のトレイスは次の者が主に行った。
　　高島桂子 西垣千賀子 西田富子
6. 遺物の写真撮影は佐藤右文氏に委託して行った。
7. 本書は飯沼暢康が執筆した。
8. 事前地形測量、水準測量、空中写真撮影は株式会社イビソクに委託して行った。
9. 発掘調査および報告書の作成にあたって次の方々からご助言、ご指導、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。(敬称・肩書き略、順不同)
　　八賀　晋・横幕　大祐・別所　秀高・中井　均
10. 発掘調査作業ならびに調査記録及び出土品の整理等には次の者が参加した。
 - ・発掘作業員
　　野網　義一・坪井　和子・勝野ゆきゑ・二村久美子・西田　富子・小林　孝美
　　今西　猛・杉山　千枝・小寺　正輝・早野よさこ・國枝さと子・杉野嘉津美
　　松原　勝・野原　茂・松岡　あや・松岡　正男・勝野千佳子・方山　禮吉
　　福田　芳子・田中壽朝枝
 - ・整理作業員
　　高島　桂子・西垣千賀子・西田　富子
11. 本報告書で使用した土層の色調は、財團法人日本色彩研究所1995『標準土色帖』を目測にて表記した。
12. 調査記録および出土品は、財團法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

目 次

序

例言

第Ⅰ章 発掘調査の経過.....	1
第1節 発掘調査に至る経緯.....	1
第2節 発掘調査の経過と方法.....	2
第Ⅱ章 遺跡周辺の立地と環境.....	3
第1節 地理的環境.....	3
第2節 歴史的環境.....	3
第Ⅲ章 層序.....	6
第Ⅳ章 造構と遺物.....	9
第1節 城ヶ谷7号墳.....	9
第2節 片山城跡.....	18
第Ⅴ章 まとめ.....	24
第1節 城ヶ谷7号墳について.....	24
第2節 片山城跡について.....	25

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図.....	1
第2図 周辺の主な遺跡.....	5
第3図 トレンチ位置図.....	7
第4図 トレンチセクション図.....	7
第5図 地形測量図.....	8
第6図 トレンチ断面図.....	11
第7図 左立柱石の根石痕実測図.....	12
第8図 石室基底石・掘り方実測図.....	13
第9図 石室実測図.....	15
第10図 遺物実測図.....	16
第11図 片山城跡城郭造構略測平面図.....	19
第12図 包含層遺物実測図(1).....	21
第13図 包含層遺物実測図(2).....	23

表 目 次

第1表 石室比較表.....	24
----------------	----

写真・図版目次

巻頭図版 城ヶ谷7号墳航空写真1・2

写真1	調査前風景（南より）	
写真2	発掘作業風景（北より）	2
写真3	第II層検出時の古墳付近（南より）	9
写真4	発見当初の古墳（西より）	9
写真5	奥壁裏込め石（北より）	10
写真6	左立柱石の根石痕（南より）	12
写真7	石室基底石と掘り方（西より）	12
写真8	玄室右側壁（東より）	14
写真9	玄室左側壁（西より）	14
写真10	須恵器（环身）	16
写真11	石材崩落の様子（南より）	17
写真12	玄室（南より）	17
写真13	玄室（北より）	17
写真14	石室基底石・掘り方（南より）	17
写真15	片山城跡 曲輪	18
写真16	片山城跡 最頂部	25
図版1	包含層出土遺物(1)	
図版2	包含層出土遺物(2)	

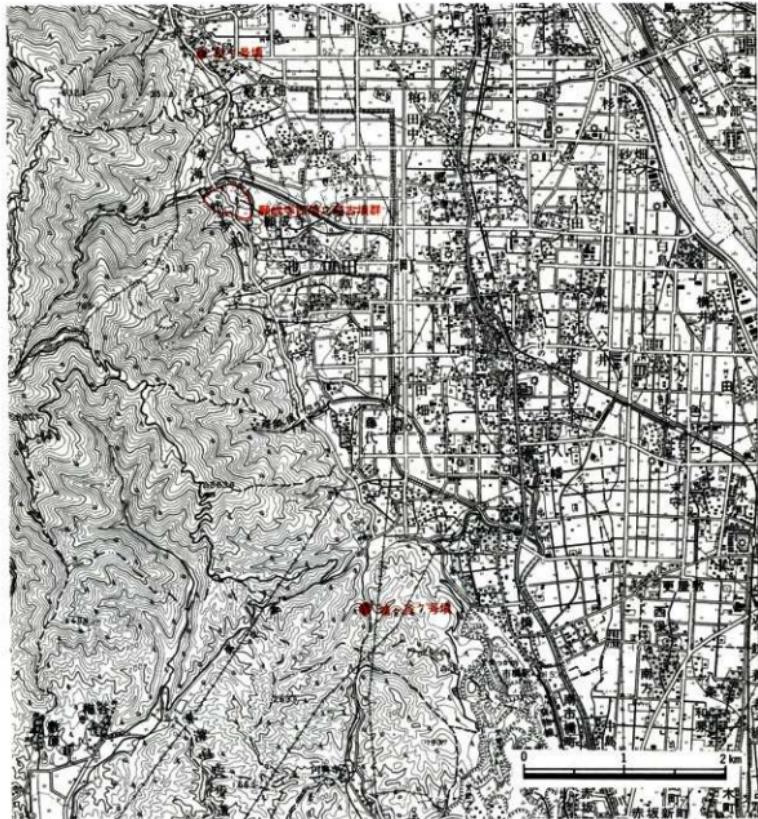


写真1 調査前風景（南より）

第Ⅰ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至る経緯

池田町には、揖斐郡と周辺の市町村を結ぶ主要幹線である国道417号線をはじめとして県道岐阜関ヶ原線などが通っている。近年の交通量の増加による道路改良整備の必要性から、一般地方道大垣池田線道路改良工事が行われることになった。従来の県道大垣池田線（池田町区间約0.7km）は、池田町側で途切れていたが、今回の道路改良工事により池田町と大垣市とを結ぶ幹線道路として大幅な道路事情の改善が期待されている。



第1図 遺跡位置図

2 第Ⅰ章 発掘調査の経過

片山城跡・城ヶ谷7号墳は、揖斐郡池田町片山字城ヶ谷地内に位置し、県道岐阜関ヶ原線との分岐点（池田町片山字市場）から約500mほど南に入った辺りから全長約80mが発掘調査区である。

片山城跡は、天正年間（16世紀末）、不破河内守光治の居城とされる。池田町片山字城ヶ谷通称並尾山の尾根上に築かれた連郭式山城跡である。平成元年度、池田町教育委員会によって分布調査及び略測調査が行われ、およその規模と城郭の配置が確認されている。道路改良工事予定区が、確認された片山城跡の遺跡範囲内を通るため、今回（財）岐阜県文化財保護センターが発掘調査をすることになった。

第2節 発掘調査の経過と方法

県道大垣池田線を挟んで調査区を東西に分け、西側をA区、東側をB区として調査を行った。

はじめに、地形測量を行い、杭打ち作業を実施した。グリッドは、8mグリッドを設定し、北西端を基準に東西方向に西からA、B、C…とアルファベットの大文字を付し、南北方向に北から1、2、3…とアラビア数字を付した。

第1回目の調査は、平成8年6月3日から6月14日まで実施した。まず、A区の表土剥ぎを行い、II層の検出作業を終了した。その結果、土師皿など少量の土器片が出土したが、遺構は認められなかった。

第2回目の調査は、同年9月18日から9月20日まで実施し、土層確認のためのトレンチ調査を行った。トレンチはA地区で2カ所、B地区で1カ所開け、それぞれの断面観察を行った。その結果、A地区では暗褐色土のIII層が平坦に広がっていることを確認した。また、B地区にはIII層がみられず、崖錐性の堆積層であるV・VI層を確認した。

第3回目の調査は、12月13日から作業を再開した。はじめに重機によるII層除去を行ったのち、III層の検出作業を行った。III層からは少量の土器片（中世陶磁器）が出土したが、中世城郭に関連するような遺構は認められなかった。しかし、調査区A区の南端付近から古墳らしき石組みが検出されたため、調査は急遽古墳の検出作業に移った。検出した古墳は、横穴式石室を有する後期古墳であり、周辺の古墳群との関係から、城ヶ谷7号墳と命名された。2月19日に空中写真撮影を実施し、2月27日に調査を終了した。



写真2 発掘作業風景
(北より)

第II章 遺跡周辺の立地と環境

第1節 地理的環境

池田町の西部は、池田山地が伊吹山地と平行して南北に走る山岳地帯で、北北東—南南西方向の谷や棱線は古生層の走向に支配されたもので、池田山地北部を東西に流れる柏川、西部を南北に流れる足打谷、大滝等の大きい谷は断層に支配されて生じたものである。池田山地の東端は北北西—南南東に走る顕著な断層崖で限られ、その下方に扇状地が発達している。池田山地の南部（梅谷山塊）から赤坂の石灰岩山地までは地質の相違により山のひだが多く、谷密度が高い。赤坂山地は石灰岩のため浸食に強く平坦な山容を示し谷密度が最も低い。調査区のある梅谷山塊は、塊状の砂岩と薄い粘板岩との互層よりなる梅谷層で構成され、その下に大石層が整合に重なっている。梅谷層の砂岩は、厚さ数mないし十数mで、中粒又粗粒であり、しばしばその中に黒色粘板岩の角礫を含む。上部には、厚さ1mないし2m以下の青灰色または灰白色のチャートの薄層が発達している。

東部の平野は池田山塊を浸食した谷が山麓扇状地をつくり、その東部に柏川が西部の山地を浸食し、揖斐川が北部の山地を浸食して砂礫を運搬し、山地を出てから何回か流路を移動しつつ扇状地をつくり、現在本町の重要な農耕地となりまた集落はこの上に立地している。¹⁾

城ヶ谷7号墳・片山城跡の所在する城ヶ谷や笛尾山は、梅谷山塊に属し、断層によって生じた亀裂帶に谷が発達し、短小な多くの支谷ができる。また、金地谷や梅谷の如く、分水嶺をはさんで反対側へ流れる場合もあり、この様な水系のある分水嶺は高度が低くなり、時として古来より通路となっている。金地谷と梅谷のある断層谷は梅谷越（池田町と垂井町を結ぶ）として利用されており、現在は県道岐阜開ヶ原線が通っている。また、城ヶ谷と円興寺谷のある断層谷は円興寺越（池田町と大垣市を結ぶ）として知られ、東海自然歩道のルートにもなっており、今回の一般地方道大垣池田線もこのルートを通る。本遺跡は、笛尾山山麓部の浸食によって発達した段丘面上に位置し、標高は約76mである。

第2節 歴史的環境

池田町は、「古墳の町」として知られている。県指定史跡「願成寺西墳之越古墳群」をはじめ約300基の古墳が町内各所に点在している。本遺跡のある片山地区周辺にも60数基の古墳が確認されている。中でも、本遺跡の南東、標高172mの山頂部に位置する遠見塚古墳は、2段築成の円墳であり、池田町最古の古墳である。平成2年度に行われた池田町教育委員会の発掘調査では、葺石、円筒埴輪、朝顔形埴輪などが出土しており、その造営年代は5世紀前葉頃とされている。²⁾ また、本遺跡の北には、標高130mの丘陵尾根突端部に雨乞塚古墳群がある。竪穴式石室を持つ円墳が2基あり、2号墳は、昭和62年度の池田町教育委員会による調査で、その築造年代は5世紀中葉とされている。³⁾ 後期の横穴式石室を有する古墳としては、寺大門古墳群、金地谷古墳群、城ヶ谷古墳群、柚ノ木古墳、高畠古墳、一ノ井古墳、大畑古墳群、トンビ塚古墳群、深谷古墳群、社宮寺古墳群、崇輪古墳群、遠見塚古墳群などが知られ、本遺跡の東部・北部の山麓を中心に点在している。

4 第II章 遺跡周辺の立地と環境

このような古墳群の他に、片山地区周辺には縄文時代から中・近世に至るまで各時代を網羅する遺跡が点在している。主な遺跡として、縄文時代の堀西遺跡・市場遺跡・弥生時代の深谷遺跡がある。また、それ以降の遺跡としては、二ノ井遺跡や高畠遺跡、善南寺跡、善南中世墓群・池ノ谷中世墓群などが点在している。⁴⁾

本町において中世城館の周知遺跡は、片山城跡の他、小寺城跡、本郷城跡がある。小寺城は、稻葉塩塵が築いた城で、天正3年廃城となった。本郷城は、美濃国守土岐頼忠の居城で、後に土岐氏の家臣国枝氏の居城となったが、関ヶ原の戦いで城下と共に焼き払われた。

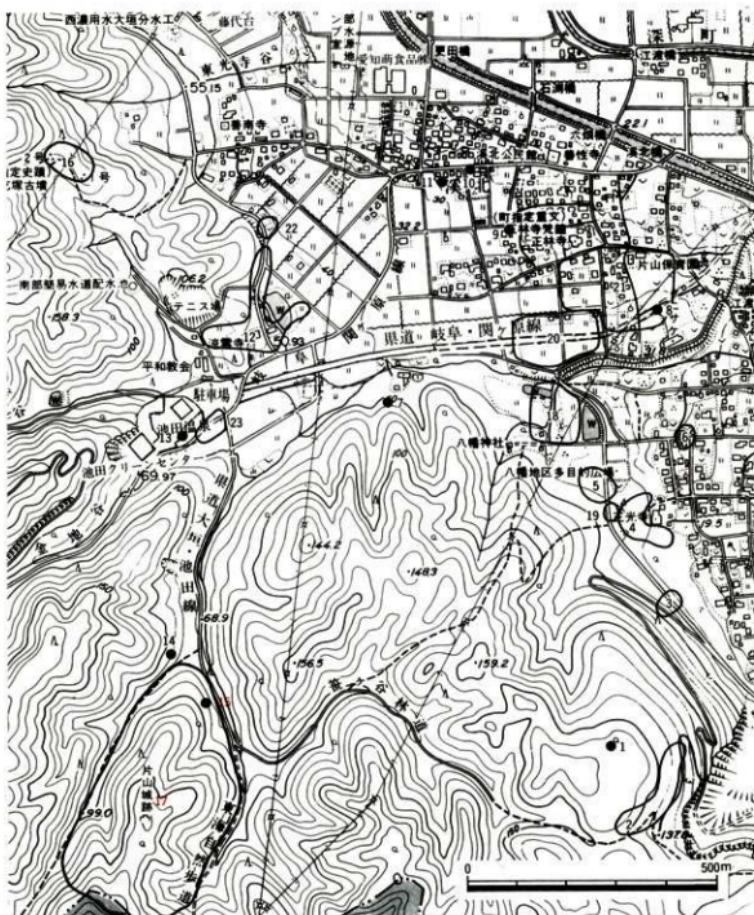
片山城は、湯殿神社の記録によれば、「天正元年8月、濃州安八郡西之保村城主不破河内守彦右衛門尉道貞が築尾山城ヶ平に砦を築いた。」とあり、城の築造は天正元年（1573）とされる。⁵⁾ 不破氏が築尾山山頂に城（砦）を築いた頃は、織田氏と浅井・朝倉氏との争いが続いた時期であり、元亀元年（1570）には、朝倉勢が徳山（藤橋村）より兵を進めて垂井（不破郡垂井町）・赤坂（大垣市）へ押し寄せて民家に火を放っている。その際、不破氏をはじめとする西美濃の豪族は、朝倉勢と戦った。片山城の築造はその戦いに遅れること三年の天正元年であるが、片山城のある築尾山の山麓には揖斐郡池田町と大垣市とを南北に結ぶ円興寺道が通っており、緊迫した戦国の情勢下では、片山城は重要な軍事拠点の一つであったと思われる。天正11年頃、不破氏は、美濃三人衆の一人である稻葉氏によって追われ、片山城を含めた池田町付近は、稻葉氏の勢力下に入った。その後、片山城は、豊臣秀吉の天下統一や江戸幕府開幕によって、軍事拠点としての必要性がなくなり、廃絶したようである。

池田町教育委員会によって、平成元年に片山城跡の調査が行われ、「片山城跡現地調査資料」が報告されている。⁶⁾ それによれば、片山城跡は、3方向に伸びる尾根線上に築かれた連郭式山城であり、尾根を削平した曲輪群と堀切によって構成されており、その遺存状態は極めて良好で、池田町や揖斐川中流域及び美濃平野部における貴重な遺跡である。

城ヶ谷7号墳は、新たに確認された古墳である。小さな谷を挟んだ北側に周知の城ヶ谷古墳群があることから、城ヶ谷7号墳とされた。城ヶ谷古墳群は、6基とされているが、現在その所在は不明である。⁷⁾ 城ヶ谷7号墳から南へ数百mで大垣市になる。その境は峠（通称円興寺越えと呼ばれる）であり、現在東海自然歩道になっている。峠を越えて大垣市円興寺町に入った山麓辺りにも、深谷古墳や石越古墳、元円興寺古墳などが点在している。その規模や形状、築造年代などは不明であるが、峠を境に同様の立地にある古墳が存在している。⁸⁾

註

- 1) 池田町 1978「池田町史 通史編」
- 2) 池田町教育委員会 1991「遠見坂古墳発掘調査報告書」
- 3) 池田町教育委員会 1989「雨乞塚2号墳発掘調査報告書」
- 4) 池田町教育委員会 1991「岐阜県揖斐郡池田町遺跡地図 改訂版」
- 5) 織田正隆 1936「本郷村池田村神社史」
- 6) 池田町教育委員会 1990「片山城跡現地調査資料」
- 7) 註4) に同じ
- 8) 大垣市教育委員会 1989「岐阜県大垣市遺跡詳細分布調査概要報告書（I）」、1990「岐阜県大垣市遺跡詳細分布調査概要報告書（II）」



1 遠見塚古墳	9 高畑古墳	17 片山城跡
2 遠見塚古墳群	10 柚ノ木古墳	18 堀西遺跡
3 崇輪古墳群	11 一ノ井古墳	19 深谷遺跡
4 社宮寺古墳群	12 寺大門古墳群	20 高畠遺跡
5 深谷古墳群	13 金地谷古墳群	21 二ノ井遺跡
6 トンビ塚古墳群	14 城ヶ谷古墳群	22 池ノ谷中世墓群
7 大畑古墳群	15 城ヶ谷7号墳	23 市場遺跡
8 南高野古墳	16 雨乞塚古墳群	

第2図 周辺の主な遺跡

第III章 層 序

調査区は、A・B両区とも植林されていた。調査前の様子はA区の北半分程は山側から谷側へ緩やかに傾斜した平坦地が続いており、南半分は崩落によると思われる砂礫層が厚く堆積し北側に比べて急傾斜であった。調査区の西端から約2m程の段差のある急な斜面になり、その上は平坦地になっていた。この平坦地が、池田町教育委員会の調査によって確認された山城に関連する曲輪と思われる。そのため、調査区北半分に広がる平坦地にも同様な遺構が存在する可能性が考えられた。B区は、全体が平坦であるものの、調査区外の10m程東から急に落ち込み、深い谷になっている。そこで、土層観察のためのトレンチ（幅1m）を調査区のA区に2カ所、B区に1カ所開け、A・Bトレンチ（A区）、Cトレンチ（B区）とした。

基本層序は、第I層（表土）から第VI層まで区分される。第II層より下の層は基本的に崖錐性の堆積層で、直径5~10mm前後の細かな角礫が大半を占める。第III層は、他の層に比べてやや黒く、植生の発達が考えられることから、第III層面で一定期間の安定した時期があったようである。

以下、各土層の性状を概述する。

第I層：10YR3/4（表土） しまりのない暗褐色砂質土。

上部に植生による腐葉土を含む。堆積は0.2m程度で、A・B両区において確認された。中近世の遺物をわずかに含む。

第II層：10YR4/4 しまりのない褐色砂質土。

径5mm前後的小礫を含む。下部にやや黄褐色砂質土が混じる所もみられた。堆積は、0.2~0.8mを測り、山側から谷側に向かって徐々に薄くなっている。B区では確認されなかった。中近世の遺物をわずかに含む。

第III層：10YR3/3 しまりのない暗褐色弱粘性砂質土。

径5mm前後的小礫や植物遺体を含み、0.1~0.2mの堆積を測る。B区では確認されなかった。中近世の遺物をわずかに含む。

第IV層：10YR5/4 しまりのないよい黄褐色弱粘性砂質土。

径5mm前後的小礫を含み、0.2~1.2mの堆積を測る。B区では確認されなかった。

第V層：10YR4/6 ややしまりのある褐色粘質土。

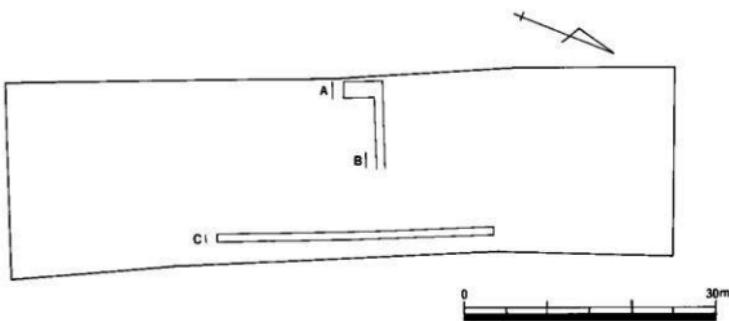
径5mm前後的小礫を含み、0.2m程度の堆積を測る。A・B両区において確認された。

第VI層：10YR5/6 しまりのある黄褐色粘質土。

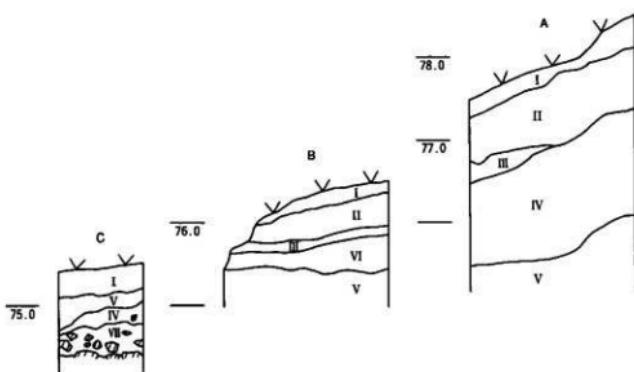
礫をほとんど含まない。A・B両区において確認された。

第VII層：10YR5/6 しまりのない黄褐色弱粘性砂質土。

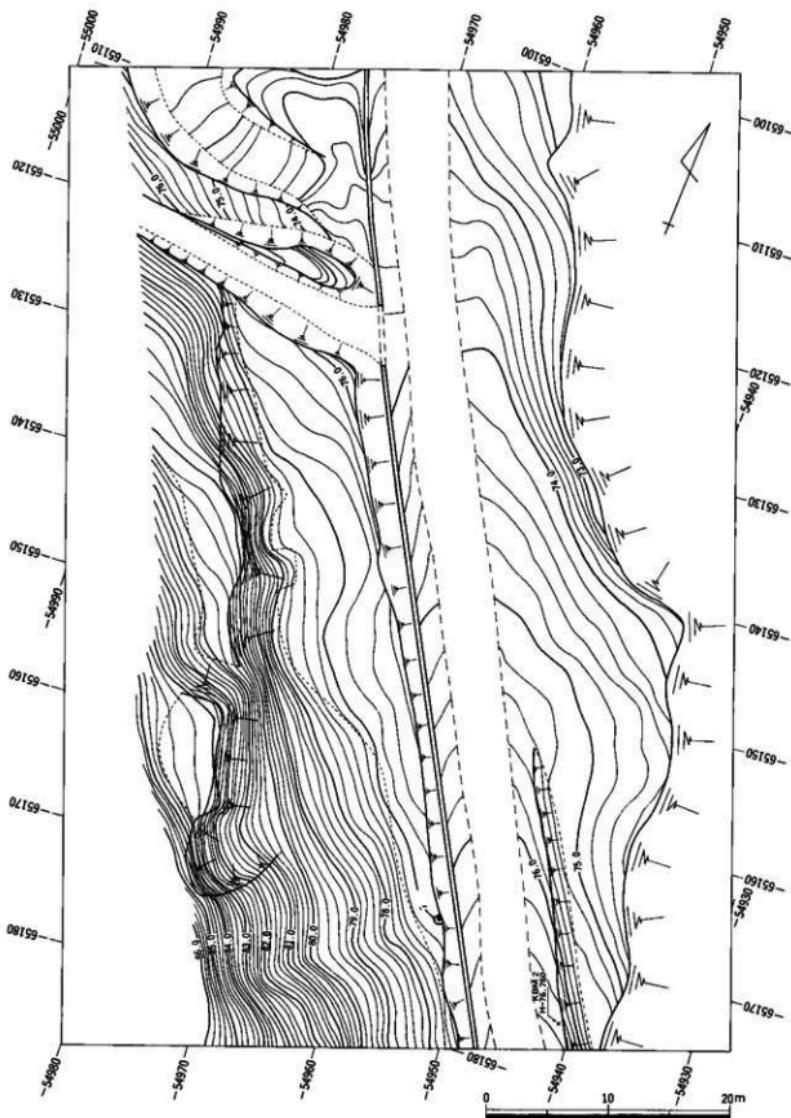
下部に拳大~人頭大の角礫を多く含む。A・B両区において確認された。



第3図 トレンチ位置図



第4図 トレンチセクション図



第5図 地形測量図

第IV章 遺構と遺物

第1節 城ヶ谷7号墳

(1) 城ヶ谷7号墳の概要

調査開始当初、城ヶ谷7号墳を確認した地点は笹尾山の山麓斜面に厚く堆積した砂礫層に覆われ、天井石や側壁の石材も露頭しておらず、その存在が全く知られていなかった。ただし本墳の所在地から5m程東南の道際に小さな祠があり、その土台石が祠には不釣り合いな程大きな石材が使われていた。おそらく古墳の石室石材を利用したものと考えられる。

中世城郭に関する遺構の検出が期待された第III層を検出するため、重機による第II層の除去作業を行っていたところ、コの字状に並ぶ石組みを検出した。調査の結果、現状で全長5.6mを測る無袖式の横穴式石室を有する古墳時代後期の円墳であることが判明した。残存する石室は遺存状況が悪く、天井石はすでに無く、側壁、奥壁のみしか認められなかった。墳丘、周溝は流失したためか規模は確認できなかった。古墳に伴う遺物は須恵器が1点（环身）だけである。



写真3
第II層検出時の古墳付近
(南より)



写真4 発見当時の古墳
(西より)

(2) 外部構造

調査前の地形は山側からの崩落による砂礫層が厚く堆積し、古墳築造当時とは大きく景観が異なっていた。墳丘の状況を確認するため、奥壁背部及び石室の主軸に直交する両側壁背部の3カ所にトレンチを設定した。

奥壁背部のトレント1では、墳丘の大半が失われており、暗褐色土（トレント1-⑤）の盛土がわずかに残っていた。暗褐色土より上部の土層（I～IV層）は、後世に堆積した流土層である。また、奥壁石材上部まで充填された掘り方理土を確認した。周溝は確認できなかった。その後流土の除去によってその暗褐色土が奥壁背部から1.1m～1.9mの地点で半円状に広がることを確認した。奥壁背部の掘り方は、約60度の角度で掘り窪めてあり、深さは約40cmを測る。奥壁背部の底には、裏込めの石である人頭大の亜角礫が数個入れられていた。

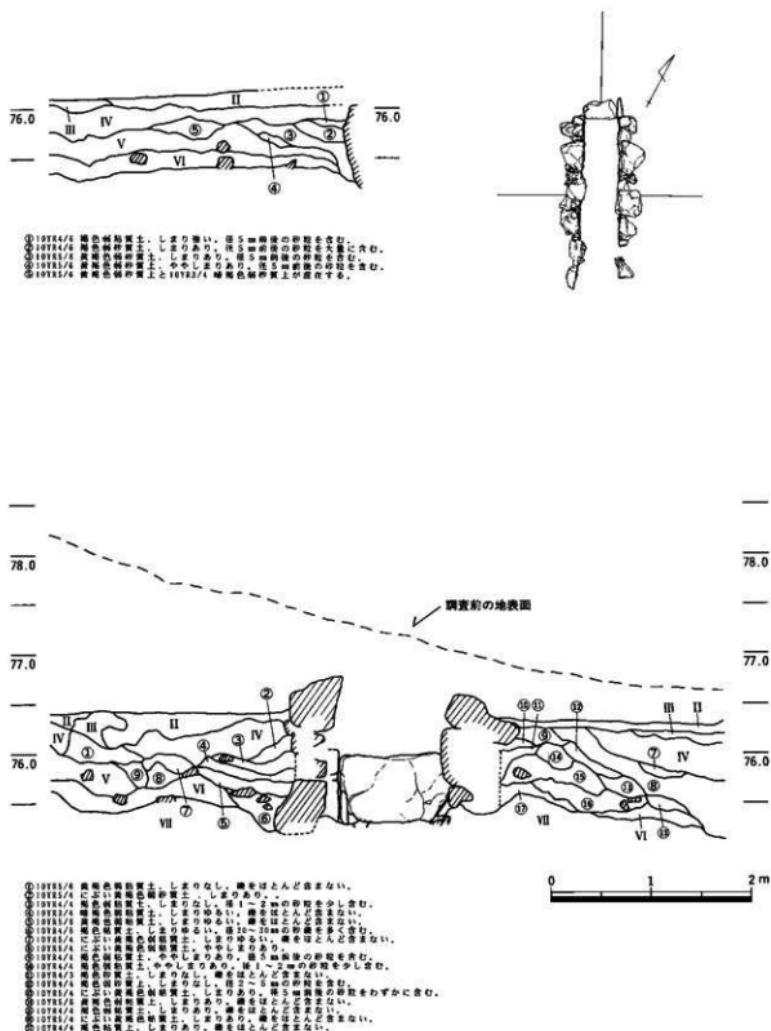
奥壁から見て右側の側壁背部のトレント2では、右側壁の3段目辺りまでの盛土と掘り方理土を確認した。盛土及び掘り方理土は1段目～3段目までの側壁石材に目地を揃えており、石室の構築に伴って徐々に盛り上げていった様子が看取できる。盛土の多くは、平坦面の造成（掘削）によって出された土を使用したと思われるが、さらに足りない土を山側の旧地表面を削り取って盛り上げたと思われる。トレント2の断面では、掘り方の上場から山側に向かって幅約1m、深さ約25cmの窪みが観察できた。しかし、調査中はその窪みに注目しなかったため、窪みの範囲を確認することはできなかった。

左側壁背部のトレント4でも、左側壁3段目辺りまでの盛土の残存が確認された。盛土と側壁石材の関係はトレント2と同じ状況を呈していた。流土層と盛土の境には、暗褐色土がわずかに確認され、墳丘上部が削り取られた後に、ある一定期間その状態が続いていたことを看取できる。

石室の掘り方は、V層から掘り下げて平坦面を形成しており、平坦面の底部はVII層に達している。現時点で確認できた掘り方の規模は、全長7.6m、最大幅3.1mを測り、深さは、奥壁背部で0.4m、右



写真5 奥壁裏込め石
(北より)



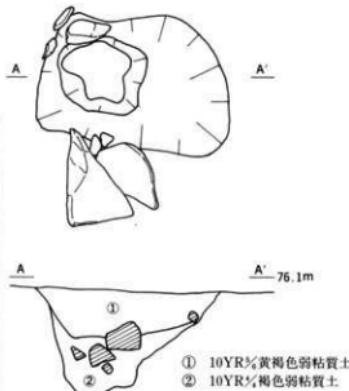
第6図 トレンチ断面図

側壁背部で0.5m、左側壁背部で0.2mを測る。山側の右側壁背部の掘り方が谷側の左側壁背部に比べ深くなっている。谷側の高さに合わせるように山側を深く掘削して平坦面を形成している。掘り方の形状は、ほぼ長方形であるが、立柱石など大型の石室石材の形に合わせて掘り広げられている部分も何ヶ所かみられ、左側壁立柱石の根石痕は、長軸1.1m、短軸0.8m、深さ0.6mを測る。

墳丘の大きさは、墳丘盛土の消失によって推定することは困難であるが、墳丘の形状は奥壁背部で半円状に広がる盛土を確認できたことから、円墳であったと思われる。



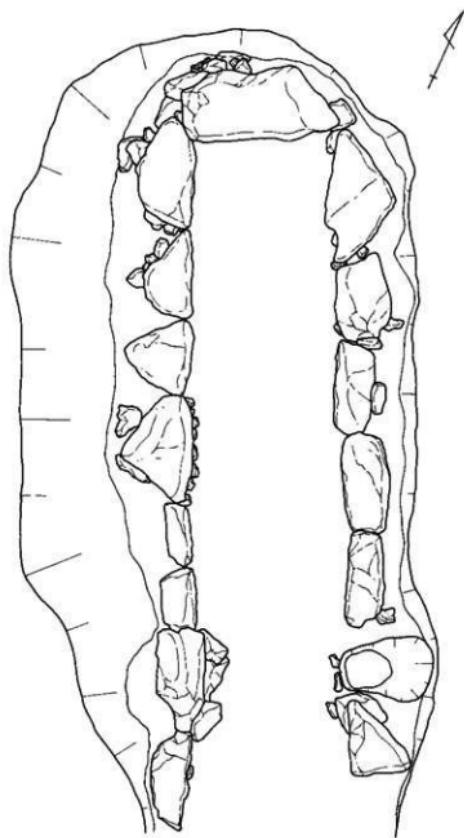
写真6 左立柱石の根石痕（南より）



第7図 左立柱石の根石痕実測図



写真7 石室基底石と掘り方（西より）



0 1 2m

第8図 石室基底石・掘り方実測図

(3) 内部構造

本墳の埋設施設は、開口部をN-151°-Eに向ける横穴式石室である。天井石や側壁上部の石材が持ち去られ、一部は石室内に崩落していた。特に羨道部の残存状況は極めて悪く、立柱石の横に側壁基底石が2個残っているだけである。残存する石室の規模は、長さが西側壁側で5.6m、東側壁側で5.2m、幅が玄室奥壁側で1.1m、玄室最大幅1.25m、羨道最大幅1.35mで、平面形はほぼ長方形を呈わずかに羨道は開いている。高さは玄室の最大高が1.5mである。

奥壁には大型の石材が使用され、構築当時は2段以上の石組みで構成されていた。現在は1段目の石材だけが残存するのみで、大きさは幅1.3m、高さ0.75m、厚さ0.6mである。

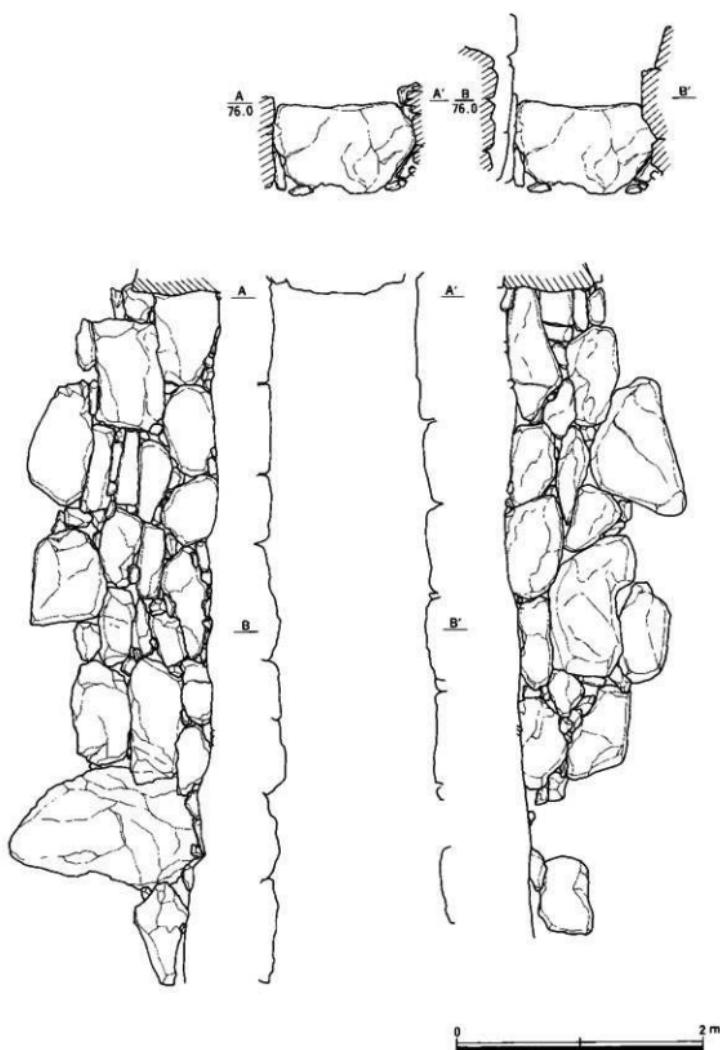
右・左側壁1段目は幅0.5~0.9mの石材を使用し、横長に置かれている。奥壁手前と玄室中央には比較的大型の石材を配置し、立柱石際で小型の石材を配置しているため、目地は奥壁から立柱石に向かって緩やかに傾斜する。



写真8
玄室右側壁
(東より)



写真9
玄室左側壁
(西より)



第9図 石室実測図

2段目以降の石組み構造には、左右側壁に違いが見られる。右側壁は、大型の石材1枚ないし小型の石材3枚で目地を揃えている。3段目は一部分しか残存していないが、大型の石材を使用して立柱石の高さに揃うように設置されている。左側壁2段目の石組みは右側壁に比べ明瞭な石の配置は見られないもののほぼ目地は揃っており、3段目には大型の石材を設置している。天井石は、側壁3段目ないし4段目の石材の上に架構されていたと想定される。

立柱石は、右側壁側のみ残存していた。幅1m、高さ1.7m、厚さ0.4mの大型石材を縦長に配置しており、左側の立柱石も根石痕の大きさから想定しては同規模の石材が配置されていたと思われる。

羨道部は、残存する石材が2個だけであった。トレンチによる範囲確認でも明瞭な掘り方や側壁石材の根石痕を検出することはできなかったため、その規模を想定することは困難である。

調査当初、後世の流入土を取り除いたところ、転落した側壁の石材が石室内に散乱しており、炭化物が混じった黒褐色土が堆積していた。遺物は1点も出土しなかったが、天井石や側壁の一部が持ち去られた後、石室が何かに利用された可能性を看取できる。その黒褐色土や転落した石材を取り除き、床面の検出作業を行ったが、床面を確認することはできなかった。床面の礫も持ち去っていた可能性が高い。想定される床面のレベルは標高約75.2mと思われる。古墳構築当初に削平された平坦面は羨道側から玄室奥壁側に向かってゆるやかに傾斜した竪穴状になっている。排水溝は確認できなかったが、平坦面底部は砂礫層（第VII層）であるため、排水施設を設けずに自然の排水を意図した結果とも推定できる。

(4) 遺物

石室内から出土した須恵器は、蓋受けを有する环身である。

出土場所は、奥壁付近の埋土（床面から約1m上）であり、原位置を留めていない。遺物の残存状況は比較的良好である。口径は12.9cm、器高3.3cmで、环身では比較的小型である。底部はなだらかな弧をえがき、中心部は少し窪む。口縁部は短く内傾しながら立ち上がり端部は比較的鋭い。底部外面3/4は右回りの回転ヘラ削りで、その他は全て回転ナデを施す。焼成は良好で、色調は灰白色を呈す。

形状から、美濃7型式（渡辺試案）陶邑II-6段階（中村）、TK209~217期（田辺）に併行する時期と思われる。¹¹

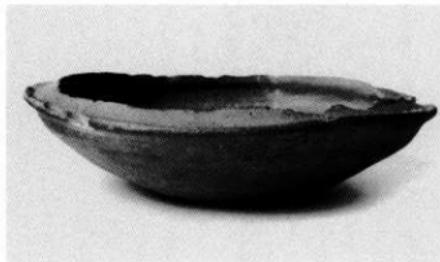


写真10 須恵器（环身）



第10図 遺物実測図（2／3）

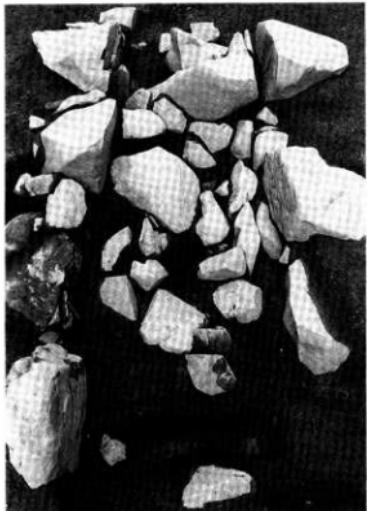


写真11 石材崩落の様子（南より）



写真12 玄室（南より）

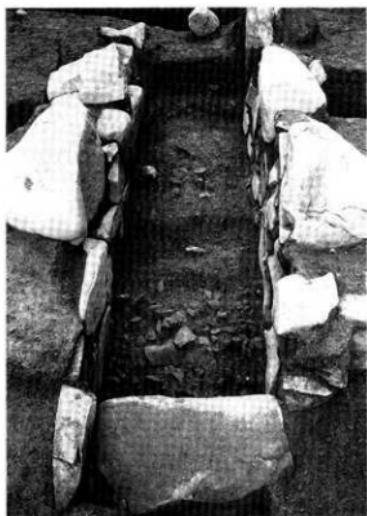


写真13 玄室（北より）



写真14 石室基底石・振り方（南より）

第2節 片山城跡

(1) 片山城跡の概要

第1章で述べたように片山城跡は、戦国時代末期（天正元年）に築かれたとされる山城で、笠尾山の尾根上に曲輪が直線的に並ぶ連郭式の山城である。城郭造構は、連郭式山城の形態をとり、尾根を削平した削平地（曲輪）と堀切からなる。堀切は、尾根に切ったもので、a）尾根線に直角に堀切を入れるもの、b）その両端を豎堀状に下方に向かって落とし込むもの、c）等高線に対してほぼ直角に豎堀状に入れるもの、などがある。これらの造構の多くは、3本の尾根上とその中央部の標高130～170m付近に集中している。そして、約50m程下がった山麓（標高80m）付近にも小さな削平地が確認されて、城郭造構との関連が指摘されている。¹⁾

調査区は、山麓で確認された曲輪のすぐ下の緩斜面にあたることから、城郭に関連する造構の検出が期待されていた。トレーナによる土層観察からは、人为的に地形が改変された様子を確認することはできなかった。当初、暗褐色土（第III層）が調査区全体に広がっているため、城郭関連の造構面と思われていたが、これも自然堆積によるものと判明し、造構を確認することはできなかった。しかし、第I層～第III層にかけて、中近世の遺物（土器・鉄製品・貨幣など）が少数ではあるが出土している。これらの遺物の中には、片山城築造時前後（16C後半）の遺物も含まれており、間接的ではあるが城郭の存在を裏付けることができた。また、それ以前の遺物や近世の遺物が混在して出土している状況から、円興寺道として古くから人々の通行があったことを証明していると考えられる。



写真15 片山城跡 曲輪



第11図 片山城跡城郭遺構略測平面図

(2) 遺物 (第12・13図 図版1・2)

出土遺物は、縄文土器、石器、陶磁器、銅錢が出土した。時代は中世から近世の遺物が比較的多い。これらの遺物は、第IV層から出土した縄文土器を除いて、第I層～第III層中より出土している。陶磁器については、中国製磁器、山茶碗、瀬戸・美濃陶器（古瀬戸期）、瀬戸・美濃陶器（大窯期）、瀬戸・美濃陶器（連房式登窯期）に分かれる。尚、明治以降の近現代の陶磁器も若干出土しているが割愛する。

縄文時代の遺物（1～3）

1は、石鎌でいわゆる飛行機鎌である。石材は流紋岩質溶岩（下呂石）で、背面・腹面の中央部に素材の面がわずかに残る。この石鎌は有茎で整った形を呈す。先端部は腹面側から折れている。また、先端部から1.5cm位のところで肩が張ったような突起が両側縁部にある。

2は、器種不明の縄文土器胴部片である。器厚は5mm前後と比較的薄手である。内面外面とも無文であるが、纖維痕がみられることから、縄文時代早期の土器と思われる。

3は、磨製石斧で、石材は玄武岩であると思われる。この磨斧は敲打によって整形し、その後刃部を丁寧に磨いている。基部は裏面から表面に折れている。刃部にはかなりの磨耗と刃こぼれがみられる。

中近世の遺物（4～22）

（4～6）は、山茶碗底部片である。4は、胎土が緻密であり、高台は整った三角形を呈す。内面には施釉がみられる。型的には古い段階の12世紀代の北部系山茶碗と思われる。

5は、胎土が粗く高台は三角形を呈しているものたちが低く、6は、5と同様に胎土が粗く、高台は台形状になっており、この2つは比較的新しい段階の南部系山茶碗と思われる。

（7、9～10、12）は、中国磁器である。7は、染付で、口縁部が端反りし、高台はヘラケズリにより斜めに面取りされている。見込には、蛟龍文が描かれ、外面体部には草花が描かれている。形状から時期は15C後葉～16C前葉頃と思われる。

9は、白磁の耳付き胴部片である。器種は細片であるためはっきりしないが壺あるいは瓶と思われる。時期は不明である。

10は、白磁の底部片である。高台はヘラケズリにより斜めに面取りされている。器種は碗あるいは皿と思われる。時期は不明である。

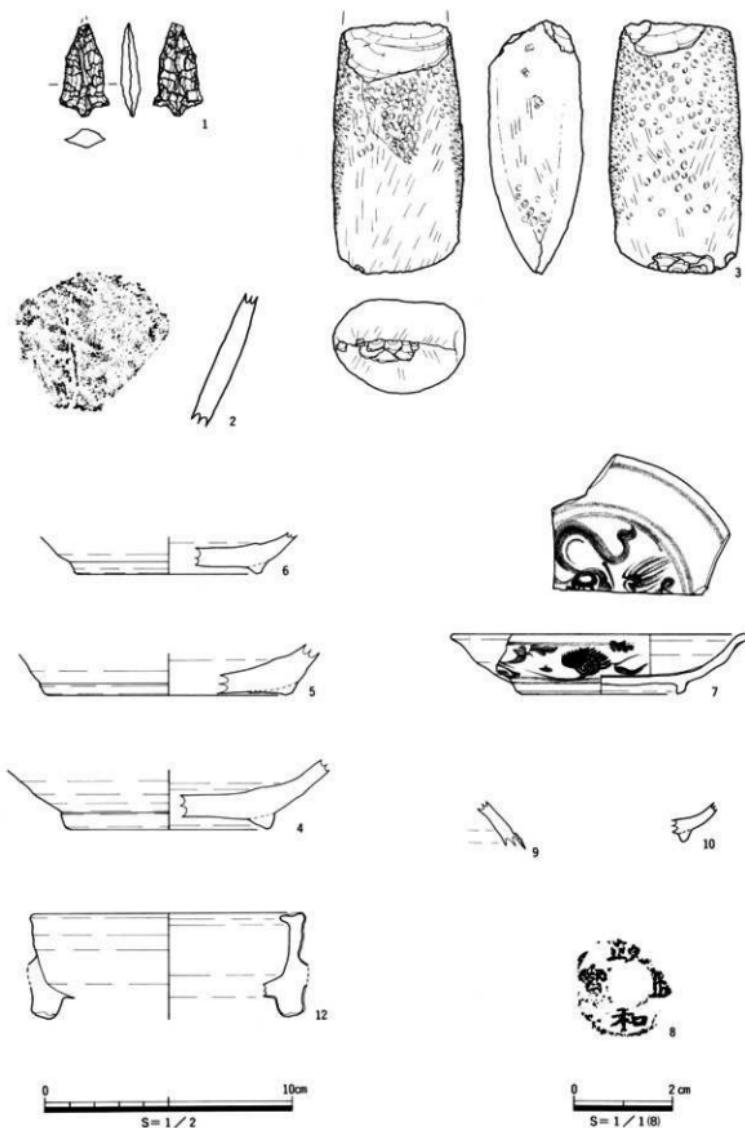
12は、青磁の香炉片である。全体に施釉されているが、内面底部と脚底部は露胎する。内面底部および内面体部の下位には使用による被熱した変色がみられる。体部はほぼ直立して立ち上がり、口縁部は水平に内湾する。中国磁器か近世以降の製品か不明である。

（11、15～22）は、中近世陶器である。11は、端反皿の口縁部で、腰部に明瞭な稜をもち、八の字状に開き、口縁は外反する。釉調は浅黄色である。胎土は炉器質で灰黄色を呈す。時期は、不明である。

15は、古瀬戸期の縁釉小皿の口縁部片である。口縁部は緩やかに外反する。口縁部外面と内面に鉄釉が施釉されている。

16は、夏目など茶道具の小瓶底部である。内面は鉄釉が施釉され、底部及び体部下位の外面は錫釉が施されている。古瀬戸期～大窯期のものと思われる。

（17、19、20）は、天目茶碗片である。17は、天目茶碗の底部片である。底部内面は鉄釉が施釉され、底部外面は錫釉が施されている。高台は削り出しによって成形され、底部には回転ヘラ削り痕がみられる。



第12図 包含層遺物実測図(1)

19は、大窯期の天目茶碗の口縁部片である。胴部がやや丸みをもって開き、口縁部下位でくびれて口縁部はやや外反する。外面とも鉄釉が施される。

20も、大窯期の天目茶碗片である。19に比べて口縁部下位のくびれが強く、口縁部は直線的に立ち上がる。赤茶色の鉄釉が施され、胴部下部は無釉である。

(18・22)は擂鉢片である。18は、擂鉢底部片で、底部から強く外に開き、内面には赤黒色の外面には青黒色の鉄釉が施されている。内面区割引きの卸目はかなり磨耗している。古瀬戸期末葉～大窯期に比定される。

22は、連房期の擂鉢底部片で、底部から開き気味に体部が立ち上がる。擂目は一単位が16条で、幅3.9cmを測る。底部内面の擂目は周縁に円状に施された後、円内部に不定方向に3方向から施されている。底部外面を除いて内面外面には赤黒色の鉄釉が施釉されている。

21は、常滑の甕片で、口頸部先端の両側が肥厚する。口縁部は平らで外側にわずかに下がり、2条の沈線がめぐる。時期は、16C後半以降と思われる。

13は、土師皿の口縁部片である。非クロ成形であり、体面は内済し、端部は内面の屈折からやや尖る。体部外面には指圧痕が残る。内面はナデにより平滑に仕上げられている。時期は、15C以降と思われる。

8は、中国銅鏡である。腐食が激しいが、北宋時代の「政和通寶」(1111～1117年)である。

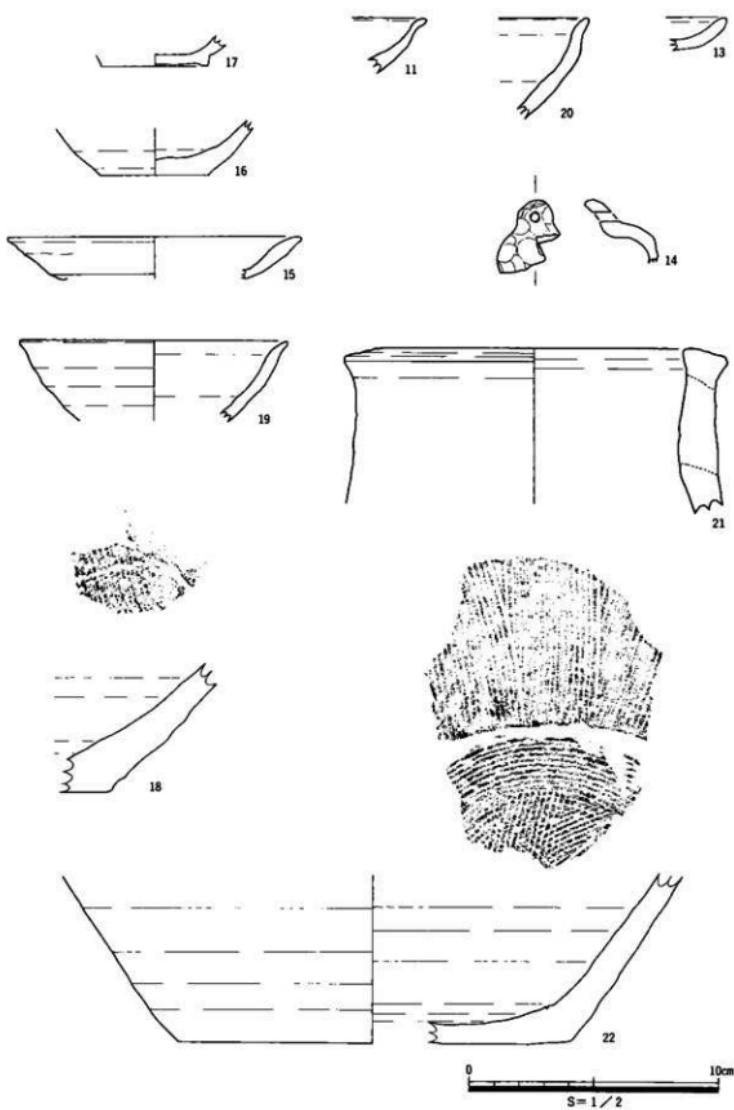
14は、土鉢片である。淡褐色系の土師質の胎土で、頂部に紐孔が1つある。全体の形や時期は不明である。

註

1) 渡辺博人 1996「美濃の後期古墳出土須恵器の様相—蓋坏の型式設定とその編年試案—」『美濃の考古学』

「美濃の考古学」刊行会

2) 第II章註6) に同じ



第13図 包含層遺物実測図(2)

第V章 まとめ

第1節 城ヶ谷7号墳について

城ヶ谷7号墳は、笹尾山の山麓に厚く堆積した土砂の下から偶然に確認した古墳である。本墳は、無袖式横穴式石室を有する古墳時代後期の古墳であることが確認され、その築造時期は、出土遺物から7世紀中頃と思われる。

墳丘の大半が流出しており、本墳の残存状況は良好ではなかった。石室は、玄室の側壁と奥壁の一部が残っているだけであった。そのため築造当時の状況を想定することは困難である。そこで、池田町内で確認されている古墳と比較検討することで石室や墳丘の規模を想定することにした。池田町内で確認されている古墳の中で本墳に最も石室構造が似ている古墳は、段1号墳(池田町舟子字北山田、現在消滅)である。¹¹⁾ 段1号墳は、石室の全長が8.

0mの横穴式石室である。玄室と羨道の塊に立柱石を配しているものの、袖を意識した構造になっていない無袖式の横穴式石室である。墳丘の規模が約10mの円墳であるとされる。本墳と段1号墳は玄室長・玄室幅がほぼ同じで、側壁基底石や立柱石の配置も非常に似ている。このことから、本墳の石室規模は約7.5~8 mであったと思われるまた、墳丘も段1号墳規模の約10mの円墳であったと想定される。

本墳は、現在確認されている池田町内の古墳としては最南西端に位置する。本墳の特色としては、築造された場所と石室の開口方向が挙げられる。山麓に存在する横穴式石室を有する後期古墳の場合、築かれる場所は山麓部の緩斜面や尾根上が多い。また、地形的に低い方向を向いて開口する場合が多い。(方角は、南・東・西が多い。)しかし、本墳は、山麓の等高線に平行するように石室を構築し、谷の上流部(山)に向かって開口している。急峻な山が迫り、立地条件としては良くない。池田町内においてこのような立地を呈する古墳は現在のところ本墳だけである。こうした悪条件のなかに立地する理由は不明だが、今後、城ヶ谷古墳群をはじめとする池田町内の古墳だけでなく円興寺跡を越えた大垣市側に点在する古墳との関係も視野に入れながら、同様な立地下にある古墳の存在有無を検討する必要があろう。

第1表 石室比較表

	城ヶ谷7号墳	段1号墳
石室	—	8.0m
玄室長	3.9m	3.85m
奥壁前幅	1.1m	1.08m
玄室最大幅	1.25m	1.25m
玄門幅	(1.1m)	1.04m
立柱石の有無	有	有
石室型式	無袖式	無袖式
石室形状	やや胴張り	やや胴張り

第2節 片山城跡について

今回の調査では片山城跡に関連する遺構を確認することはできなかった。しかし、出土遺物の中に戦国時代末期の遺物を確認できたことは、天正元年に不破河内守光治によって片山城（磐）が築造されたことを側面的に立証することができ、その意義は大きいと思われる。²⁾また、平安時代末～近世に至る遺物が出土したことは、調査区内を通る円興寺道を古くから人々が往来していたことをうかがわせるものである。遺物の中には、貨幣「政和通寶」（中国・北宋・12C）や中国製磁器が認められた。これらの遺物が城郭に関わるものかは不明であるが、当該調査区より北へ約500mの辺りに「市場」という地名があり、言い伝えによれば、その辺りに市が立ち往來の人々で賑わったという。室町時代中頃の物語「小栗判官と照手姫」³⁾にもこの「市場」は登場する。出土した貨幣や磁器片はその名残かもしれない。

最後に、本報告書の作成にあたって、また、発掘調査の現場において、ご教示・ご協力いただいた方々に記して感謝したいと思います。

註

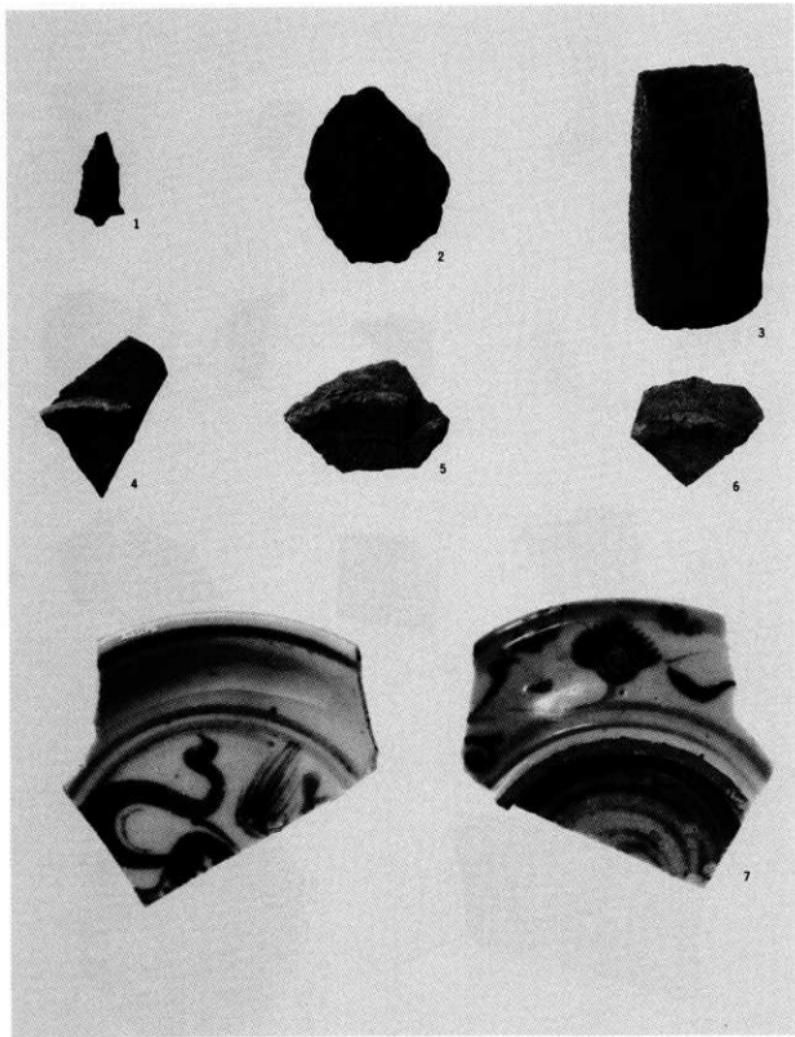
- 1) 池田町教育委員会 1985 「段第1号・第2号古墳発掘調査報告書」
- 2) これまで、片山城跡周辺では、戦国時代前後の遺物は採集されていない。
- 3) 池田町八幡公民館 1990 「ふるさとやわた」

常陸国の郡代横山将監の娘照手姫は京の都へ行儀見習いに行き小栗正清と良い仲になるが、正清は照手姫の父将監に殺されてしまう。悲しみのあまり家を出た照手姫は、悪者にだまされ青墓（大垣市青墓町）の長者大炊氏に売られてしまう。照手姫は、市場（池田町）で市が立つ度に青墓から円興寺道を通って買物をし、重い荷を背負ってまた青墓まで帰ったという。やがて、奇跡的にも生き返った正清が照手姫を探し当て、二人は幸せに暮らしたという。



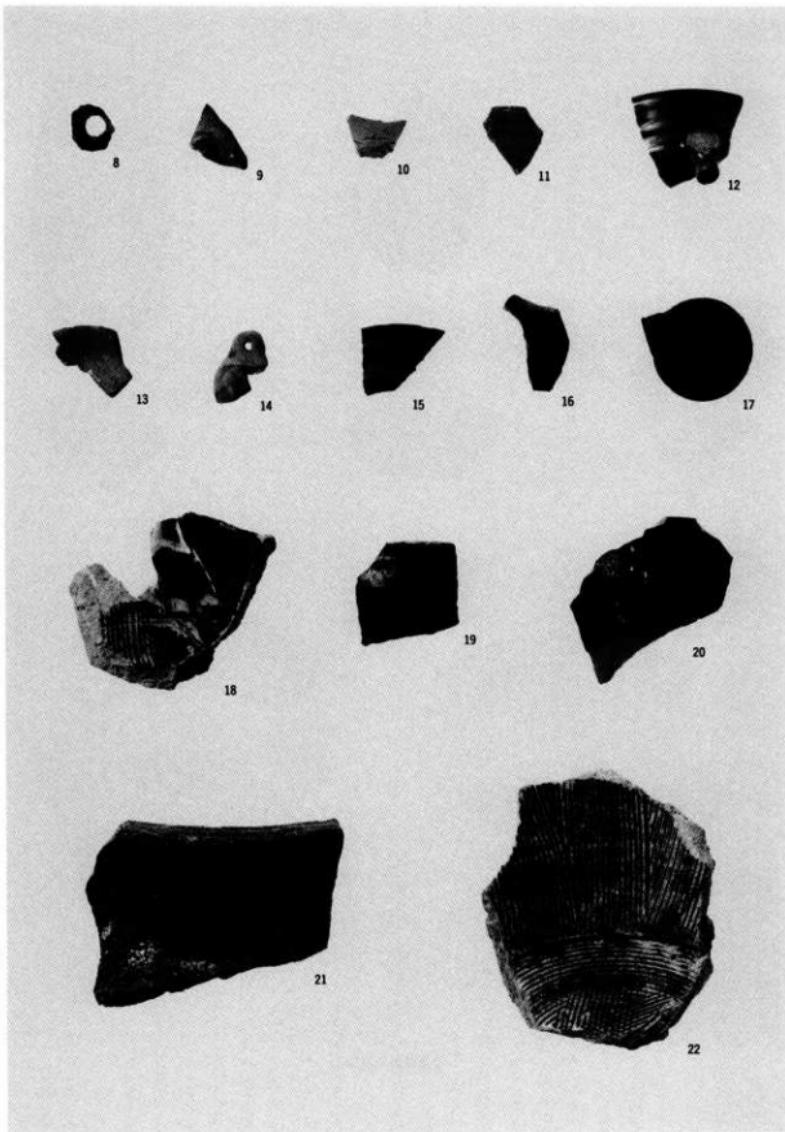
写真16 片山城跡最頂部

圖版 1



包含層出土遺物(1)

図版 2



包含層出土遺物(2)

報告書抄録

ふりがな	しろがたにななごうふん・かたやまじょうあと							
書名	城ヶ谷7号墳・片山城跡							
副書名	一般地方道大垣池田線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター 調査報告書							
シリーズ番号	第47集							
編著者名	飯沼暢康							
編集機関	財団法人岐阜県文化財保護センター							
所在地	〒500-8708 岐阜県岐阜市司町1(岐阜総合庁舎内) Tel058(264)1111(814)							
発行年月日	西暦1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在名	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積m ²	調査原因	
しろがたにななごうふん 城ヶ谷7号墳 わたいやまじょうあと 片山城跡	ぎふけんけいひやく 岐阜県揖斐郡 いひぐん いひだらこうかたやまあと 池田町片山字 しらがたのやまと 城ヶ谷	21404	08770 01943	35° 24' 33' 48"	136° 33' 24"	19960603 19970227	1,200m ²	一般地方道 大垣池田線 道路改良工 事に伴う
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
城ヶ谷7号墳 片山城跡	古墳	古墳時代 室町時代	古墳	須恵器 中国磁器 中国貨幣 中近世陶器				

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第47集

城ヶ谷7号墳・片山城跡

一般地方道大垣池田線道路改良工事に伴う
緊急発掘調査報告書

1998年3月25日 印刷

1998年3月31日 刊行

編集・発行 財団法人 岐阜県文化財保護センター
岐阜県岐阜市司町1 (岐阜総合庁舎内)

印 刷 西 濃 印 刷 株 式 会 社